

日本の名作名文ハイライト

葉桜と魔笛

太宰治

朗読 坪井祐実

出所 『声の空間』 太宰治作品集』

<http://www.voiceblog.jp/hana-sumire024/>

teabreak 編

葉桜と魔笛

太宰治

●前半部分

桜が散って、このように葉桜のころになれば、私は、きっと思い出します。——と、その老夫人は物語る。——いまから三十五年まえ、父はその頃まだ存命中でございました、私の一家、と言いましても、母はその七年まえ私が十三のときに、もう他界なされて、あとは、父と、私と妹と三人きりの家庭でございましたが、父は、私十八、妹十六のときに島根県の日本海に沿った人口二万余りのあるお城下まちに、中学校長として赴任して来て、かっこうの借家もなかったので、町はずれの、もうすぐ山に近いところに一つ離れてぼつんと建つてあるお寺の、離れ座敷、二部屋拝借して、そこに、ずっと、六年目に松江の中学校に転任になるまで、住んでいました。私が結婚致したのは、松江に来てからのことで、二十四の秋でございますから、当時としてはずいぶん遅い結婚でございました。早くから母に死なれ、父は頑固一徹の学者気質で、世俗のことには、とんと、うとく、私がいなくなれば、一家の切りまわしが、まるで駄目になることが、わかっていましたので、私も、それまでにいくらも話があったのでございますが、家を捨ててまで、よそへお嫁に行く気が起らなかったのでございます。せめて、妹さえ丈夫でございましたならば、私も、少し気楽だったのですけれども、妹は、私に似ないで、たいへん美しく、髪も長く、とてもよくできる、可愛い子でございましたが、からだが弱く、その城下まち

へ赴任して、二年目の春、私二十、妹十八で、妹は、死にました。そのころの、これは、お話でございます。妹は、もう、よほどまえから、いけなかったのでございます。腎臓結核という、わるい病気でございまして、気のついたときには、両方の腎臓が、もう虫食われてしまっていたのだそうで、医者も、百日以内、とはっきり父に言いました。どうにも、手のほどこし様がないのだそうでございます。ひとつき経ち、ふたつき経って、そろそろ百日目がちかくなって来ても、私たちはだまって見ていなければいけません。妹は、何も知らず、割に元気で、終日寢床に寝たきりなのでございますが、それでも、陽気に歌をうたったり、冗談言ったり、私に甘えたり、これがもう三、四十日経つと、死んでゆくのだ、はっきり、それにきまっているのだ、と思うと、胸が一ぱいになり、総身を縫針で突き刺されるように苦しく、私は、気が狂うようになってしまいます。三月、四月、五月、そうです。五月のなかば、私は、あの日を忘れません。

野も山も新緑で、はだかになってしまいたいほど温く、私には、新緑がまぶしく、眼にちかちか痛くって、ひとり、いろいろ考えごとをしながら帯の間に片手をそっと差しいれ、うなだれて野道を歩き、考えること、考えること、みんな苦しいことばかりで息ができなくなるくらい、私は、身悶えしながら歩きました。どおん、どおん、と春の土の底の底から、まるで十万億土から響いて来るように、幽かな、けれども、おそろしく幅のひろい、まるで地獄の底で大きな大きな太鼓でも打ち鳴らしているような、おどろおどろした物音が、絶え

間なく響いて来て、私には、その恐しい物音が、なんであるか、わからず、ほんとうにもう自分が狂ってしまったのではないか、と思い、そのまま、からだ
が凝結して立ちすくみ、突然わあっ！ と大声が出て、立っていられずぺたん
と草原に座って、思い切って泣いてしまいました。

あとで知ったことですが、あの恐しい不思議な物音は、日本海大海
戦、軍艦の大砲の音だったのでございます。東郷提督の命令二下で、露国のバ
ルチック艦隊を 一挙に撃滅なさるための、大激戦の最中だったのでございます。
ちようど、そのころでございますものね。海軍記念日は、ことしも、また、そ
ろそろやってまいります。あの海岸の城下まちにも、大砲の音が、おどろおど
ろ聞えて来て、まちの人たちも、生きたそらがなかったのでございますよすが、
私は、そんなこととは知らず、ただもう妹のことで一ぱいで、半気違いの有様
だったので、何か不吉な地獄の太鼓のような気がして、ながいこと草原で、顔
もあげずに泣きつづけておりました。日が暮れかけて来たころ、私はやっと立
ちあがって、死んだように、ぼんやりなってお寺へ帰ってまいりました。

「ねえさん。」と妹が呼んでおります。妹も、そのころは、痩せ衰えて、ち
からなく、自分でも、うすうす、もうそんなに永くないことを知って来ている
様子で、以前のように、あまり何かと私に無理難題いつけて甘ったれるよう
なことが、なくなってしまうて、私には、それがまた「そうつらいのでございます。

「ねえさん、この手紙、いつ来たの？」

私は、はっと、むねを突かれ、顔の血の気がなくなったのを自分ではっきり

意識いたしました。

「いつ来たの？」妹は、無心のようにでございます。私は、気を取り直して、「ついさっき。あなたが眠っていらっしやる間に。あなた、笑いながら眠っていたわ。あたし、こっそりやあなたの枕もとに置いといたの。知らなかったでしょう？」

「ああ、知らなかった。」妹は、夕闇の迫った薄暗い部屋の中で、白く美しく笑って、「ねえさん、あたし、この手紙読んだの。おかしいわ。あたしの知らないとなのよ。」

知らないことがあるものか。私は、その手紙の差出人のM・Tという男のひとを知っております。ちゃんと知っていたのでございます。いいえ、お逢いたことはないのですが、私が、その五、六日まえ、妹の箆笥をそっと整理して、その折に、ひとつの引き出しの奥底に、一束の手紙が、緑のリボンできっちり結ばれて隠されてあるのを発見いたし、いけないことでしょうかけれども、リボンをほどいて、見てしまったのでございます。およそ三十通ほどの手紙、全部がそのM・Tさんからのお手紙だったのでございます。もっとも手紙のおもてには、M・Tさんのお名前は書かれておりませぬ。手紙の中にちゃんと書かれてあるのでございます。そうして、手紙のおもてには、差出人としていろいろの女のひとの名前が記されてあって、それがみんな、實在の、妹のお友達のお名前でございますいたので、私も父も、こんなにどっさり男のひとと文通しているなど、夢にも気付かなかったのでございます。